

道免和久（編）

リハビリテーション評価データブック

原 寛美（相澤病院総合リハビリテーションセンター）

リハビリテーション医療の場に必須の書籍

兵庫医科大学リハビリテーション医学教室教授の道免和久先生は、脳卒中上肢麻痺改善のための CI 療法をわが国に導入しその普及に努めるなど、日本におけるリハビリテーション医学・医療のゆるぎないオピニオンリーダーの一人であり、氏の数々の業績と活躍にはリハビリテーション医療の臨床に携わっている多くのスタッフはじめ、リハビリテーション医療を必要としている患者さんからも高く評価されている。

その道免先生が編集した『リハビリテーション評価データブック』がこのたび発刊された。道免先生は、この著作の構想から上梓までには 10 年の歳月を要したとしており、今日のリハビリテーション医学・医療において汎用されている機能評価法をほぼ網羅すべく渉猟してある。その項目数は 800 にも及ぶが、コンパクトな辞書サイズとして編集されている労作である。

対象疾患の分野は、脳卒中・脳損傷、高次脳機能障害から始まり、循環器・呼吸器疾患などのリハビリテーション科専門医、あるいはリハビリテーションスタッフの必修研修範囲をすべて含んでおり、さらに精神疾患、がん、QOL、一般検査までも網羅されている。それぞれの検査法がいかなる障害を対象としているか、そしてその評価尺度は何に分類されるか（例：順序尺度、間隔尺度など）、どのような方法での評価法（例：計測、観察、質問紙など）であるか、そして構成として評価結果の数値の最大値と最小値が示されている。また、評価法の重要度を、MEDLINE の文献ヒット数などを参考に★印 5 つから 1 つまでで表記されており、評価の優先度を鑑みるときに参考となる。さらに、その評価法のオリジナル文献と関連評価項目が記載されており、読者が該当評価法を詳しくアクセスすることを援助しており、その点でも繊細な配慮がなされていることが特徴である。その意味からも本書はリハビリテーション医療の場には必須の書籍と言える。

リハビリテーション医療のみならず、すべての医

学・医療においては数値化あるいは標準化された評価法が、診断と治療効果判定には必須である。「医学的基本的方法論の一つは、“Measure something”（何かを測定せよ）である」と説き心に残っているのは、学生時代から私淑する井村裕夫先生（元京大総長）である。評価法の進化が今日の医学・医療の根幹を支えているとも言える。

とりわけリハビリテーション医学の診断と治療効果判定では、各種の評価方法を複数使用することが求められており、他の医学領域以上に多岐にわたる評価法が存在する。

例えば、脳損傷による高次脳機能障害の診断では、簡便な MMSE や改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）は正常範囲であっても、他の複数の詳細な神経心理検査法を用いることで、初めて障害像を客観的に明らかにできる場合が多い。どのような検査法を用いるかにより診断そのものが左右されることになる。また今日、脳卒中上肢麻痺機能回復のための新しい治療法である CI 療法や経頭蓋的磁気刺激 rTMS 法などを実施する場合には、治療前後に Fugl-Meyer Assessment Set, Wolf Motor Function Test, STEF, 10 秒テスト、改訂 Ashworth スケールなどの複数の評価方法を実施することで、治療効果判定が可能となり、その治療法が機能回復に資するものであるかが明らかとされる。

本書の執筆者は総勢 63 名に及ぶ。そこにはリハビリテーション医学・医療の発展のために、リハビリテーションチームを構築し続ける強い意志の存在を編集者にうかがうことができる。そのような強固な指導者の存在が、日本専門医制評価・認定機構のなかで基本 18 領域の一つとして確固として位置づけられている“リハビリテーション科”という今日の臨床医学では欠くことのできない領域の発展のために求められていることを、本書を傍らに置き実感している。

（B6 変型判 616 頁 定価 4,200 円＋税 医学書院刊 2010）